

仕懸
吳

俵
手本

編前

北齋画

~13
1963
38



仕懸 仇手本 前編

初版より六版目
まゝくちう川の
せうひよなるひ
よび出しれ
とらげり

仇手本

後編

通神藏

七版目より十版めを
すけらるのせうひ
みまごころあんの
とらげり

両冊とも本賣出り

自序

文類考本

二

猪牙 四天川 舟

ををて名 列 先 後 法 争 相

る 神 殿 友 友 友 友 友

由 由 由 由 由 由 由 由

が 糸 結 け 玉 玉 玉 玉 玉

へ13
1963
38

野々勤平の勇程入の角角
目隠しと常に念乃衛はほふ松花
能小波を中るる高深の生際を
又を引けおかす根指待人を占ぬ
一室は出居旅におおれ世共
にともむと也師直が性悪のほと世つ

扉一

善念神正の二巴合ていそ川の世界
とたより一海は紙を本は編は通
新戦大極二の理小分多小廊乃
陰葉の湯都て全款十一回わ
ねふら坂急を本此書ねらひ

作者のいろはとえゆふし終一
の

小金お川丸

夜

序二

入序

夕おふ大臣柱とよのまをい且

ふやぐみみ楽路堂よぶをい

おひのせいの可ちんら時世くと

鳴鳥のたけりまアハラ怪しや

字らうすのろくろ魂を引

其^も本^{ほん}文^{ぶん}の清^{きよ}書^{しよ}め^め習^{しゆ}ひて^て悦^{えつ}
 手^て本^{ほん}と名^なづ^づく^く味^{あじ}厚^{あつ}邊^へ乃^の
 通^と神^{かみ}花^{はな}のち^ちほ^ほこ^こお^おめ^めの^のさ^さま^まし
 や^やい^いさ^さら^らば^ばア

山旭亭間葉行速

二序二

第一回

雀^{つが}岡^{たか}山^{やま}稻^い本^{ほん}樓^の遊^{あそ}宴^ひ
 高^{たか}野^の屋^や妓^い貌^{かみ}好^{この}戲^{あそ}世^よ界^か

白拍子



香保垂

凡^{たゞ}推^{おし}ても^もか^かく^くあ^あま^まも^もあ^あ
 せ^せし^しか^かし^しの^の山^のの^のま^まよ^よ
 出^い在^ざ人^{にん}の^の世^よ界^か

弟二回

若狭樓ニ而小波力弥ニ逢
本藏松ヶ枝ヲ切之世界



若狭屋助七

第三回

於屋形高直遠半相諍
於標船頭勘平契世界

遠州屋

半兵衛



第四回

遠州屋半兵衛自腹之奢
稲本而薬種次郎悪世界



おん屋や
大屋屋由良之助

第五回

勤平千崎跡吾ト途中話
定九郎ニ逢届夜泊世界



舟宿

早野屋勤平

第六回

山家町與市兵衛カ隱家
標為勘平勒奉公ノ世界

使通左佗



附言

大磯仁糖好も急倉れ舞不忠多と活気
急里なり芳朱蝶舞天何じあんと風流
世女雷鳴妓女もつりやうココロニカリキの
ゆづ花とまふ糸と共ふ財まりぬされど名お
今もある所なりとらんあつた若所の橋上
みとほくしあつても蛤町に居をこ構り

たゞしや押込の蟻宿る志んきんしの
連引ふうらましく國の頑要長子つた玉
さねる外肺お送る女中りおる後着
船車一れお志申う兵曹海の押のひえ
顔とくの念せのどよめおまて方も勤れ
情とじしく中ら妓女の達し美しそや
たもこれるれおれ書あたらんわごうおせの

ゆさつぬ舟のるぞとめぬう美川舟一夜
のうの浪枕おるおるを送り夕ふ
色客とやんゆらとむとたがぬり
切小指おとせらる血の涙あまづく一身を
抛く生涯とわやまるも悲がたあ美の聲
ゆ出るお空送らもて花さるも一花わら
ぬうらの美とあるぞとふと双々園乃

いろりの脚花のさうりふ月を懐かた
 とんるものうやといそねしし
 千金も
 一夜を分も一切執業は是飛たて
 是ることを知るふ者へしぞあした
 いづろまぶる志くす女中衆の口を
 あらねきしちのりさきふてあつや
 せうと志つふ

仕懸
 莫幕

仇手本

小金あつ丸著
 神


第一回

吾等々園稲本世界
 於白天地の界其理ありては女あり
 安ありと後名何るなりとた人乃
 玄糸板ありし一まはたむれ親は
 長歩暮の低め居く火の見者の

たりき後うらやまべとしんど者ま枝の
 高れとちる枝の低と離る形船の
 低と揚の上の人と成る高山の月高
 して是の五湖のあも深ゆ
 窠ぐ一凸凹と世の理之今日の理
 と以首成もゆたぐあなむびのゆ
 女ぐとねのしと高樾の言ふ勝ん
 とみささぐゆふささるべさの低を

●上

悉れな段とよと雲手な屋を低て
 猪身と思ふ朝の名と笑ふ笑も
 可あの手ゆめあまやうなりぬ穢倉鶴ヶ岡
 八幡の山小二折ゆめさうね二折茶屋六
 いろなる理とをら其海ありて後名謝
 志るべまが申ゆ一珠目とひつちやうま樓
 稲本とく好ら昌あぶかきもなぐらも
 同くる家入と

是利や

ありつちやうまの
 ありつちやうまの
 ありつちやうまの

おまゝお助へるもの

あんなや

後ヶのまをん母のていし
世三のまをん世とまをんや

まのりまゝ

まのりまゝ

うのやとらふこれ
後ヶのまをん世とまをんや

助やとら

くこわんかきねぐらひのまゝ

あやを

七

だんまよりく

えんせんとよ

トウマツル

女中

マ

まらでゆあふり

すけ

女中

あやごころ

あやごころ

トウマツル

あやごころ

くんねん

女中

あやごころ

あやごころ

うらやま

あやごころ

あやごころ

あやごころ

あやごころ

あやごころ

あやごころ

あやごころ

あやごころ

あやごころ

あやごころ

あやごころ

あやごころ

あやごころ

あやごころ

あやごころ

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a large initial letter 'S' and continues with several lines of text. A small square box containing a symbol is visible at the start of the second line. The text ends with a large, decorative flourish.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a large initial letter 'S' and continues with several lines of text. A small square box containing a symbol is visible at the start of the second line. The text ends with a large, decorative flourish.

かつらんーめんきふくわうねんか 金 さまん
 いんま 玉 やあかんでんぢあをんたてであ
 うじがせまふくして *Samuwa* ののいあま
 まあらハハしらけんああんじく 玉 子
空 ちああーいんま 玉 ちゆうじぶせらす
 ぎのくろくぶくしん *Samuwa* ちゆうじぶせらす
 ぶうすうくうまのつらあ 玉 じよサ
 あまがの *Samuwa* じよ 玉 じよ 玉 じよ

部 あまさん 玉 ちゆう 玉 ちゆう 玉 ちゆう
 かんぢく 玉 ちゆう 玉 ちゆう 玉 ちゆう 玉 ちゆう
玉 ちゆう 玉 ちゆう 玉 ちゆう 玉 ちゆう 玉 ちゆう

チー

自跋
 精身と茶杯の遅延の茶杯の茶杯の
 の先を待てる先を待つと前座の歩法
 思ひあはれぬあるも先延とさるれを
 ちぐさな先あるの六徳の先延の予は
 ありとて侍手との戯れは茶杯の全く
 字氣成しとむもあはれ實は利を
 流るる先延と先延のと倒のきまじり成
 ありたるとらうらたると



